

樹氷の魅力

札幌の冬の風物詩に大通り公園のホワイトイルミネーションがすっかり定着してしまつた。雪景色に立ち並ぶ冬枯れの木々を無数の豆電球で飾り、都会の中に樹氷の世界を出現させて幻想の世界に誘いこんでいる。

樹氷と言えば、昨年の暮れに北海道の十勝岳の中腹、二八〇坪の高所にある十勝岳温泉を訪れてみたが、雪深い一軒宿の近くにダケカンバとおぼしき大木が樹氷で覆われ氷の花を咲かせていた。秋の落葉以来、死んだふりをしていた裸の木々が真冬の寒さで氷の花の白い衣装を着飾つたように映る。

断崖の上に造られた雪に囲まれた露天風呂から見下ろすはるか下には、雪に覆われた深い谷に川面が顔をのぞかせ谷ぞいの木々に霧氷の花が咲いていた。火山から流れでてきた強い酸性の水が凍らず厳寒の冷気に触れて霧を発生させて水蒸気を生みだし霧氷を造りだしている。

樹氷はマイナス十℃とか二十度になつても凍らないという過冷却の霧や雲の小さな水滴が、木の枝々にぶつかり凍りついてしまうもので、風に運ばれた百分の何ミリという微水滴が一枚一枚ごく薄い氷の皮で枝々を包み込み、ガラス細工のような芸術品を見せてくれる。樹氷とは別に水蒸気が直接、氷の結晶となつて付着し、まうのを樹に霜が降りると書いて樹霜という。樹氷樹霜と粗氷をひつくるめて霧氷 むひょう

と呼んでいる。

冬枯れのダケカンバや落葉松の枝々に繊細なガラス細工を想もわせる凍ついた霧氷が朝日に輝く瞬間が最も幻想的である。風が吹いて霧氷がゆれたらどんな音色になるのだろうか。想像するだけでも胸が踊る。霧氷は信州の山々でもしばしば見られるので、山スキを楽しむ時に少し早起きをして寒さ耐えれば白い幻想の世界に迷い込むことが出来るだろう。